

若者の高い志で誕生した専修大学 創業者4人のエピソード



相馬 永胤



田尻稲次郎



目賀田種太郎



駒井 重格

2004年(平16)創立125年目を迎える専修大学は、日本の私立大学の中でも有数の歴史を誇る。米国に留学した4人の青年が、自ら習得した学問を祖国の青年に教授したいと1880年(明13)9月16日(「大学創立記念日」)、日本の私学では初めて、経済学と法律学の専門教育課程「専修学校」(専修大学の前身)を誕生させた。

近代日本の黎明期を闊達に駆け抜けた4人の創業者、相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格はこの時、全員が20代、30代前半という若さだった。その足跡を振り返ってみよう。

9月16日は「大学創立記念日」

留学の地・米国で育んだ建学の夢

明治維新、とうとうと流れ込む西欧からの文物を前に、学術を習得した人材を育成しようと、政府は欧米に人を送る。

相馬、田尻、目賀田、駒井の4人も、1870年(明3)から74年(明7)の間に国費や藩費でアメリカに留学。今の大学生の年代であった4人はこの留学中に出会い、祖国で学校を創立し、有為な人材を育成し、時代の要請に応えようという夢が芽生えたのだ。

異国で広がる友情の輪

ニューヨークのコロンビア法律学校に学んだ相馬は、日本人留学生だけで構成する研究会の設立を思いつく。相馬らは法学徒クラブ「日本法律会社」を結成、まもなくハーバード法律学校に学んでいた目賀田もこれに加わった。やがてクラブの規約「日本法律会社憲法」が作られる。その法学徒の中に、学校創立構想が芽生えてくる。

コロンビア法律学校を卒業した相馬はニューヘブンのエール大学大学院に進学し文科経済学を専攻。先進国アメリカの経済学を修めることになる。経済学専科にはエール大学で学んでいた田尻がいた。相馬は毎日のように田尻の下宿を訪ね、友情を育む。さらに下宿にはラトガース大学(ニューブルンスウィック)で経済学を学んでいた駒井もよく顔を出していた。駒井は相馬、田尻より3歳年下で目賀田と同年だった。ここに幕末、明治維新の動乱を駆け抜けアメリカの最新知識を身につけた4人の友情の「輪」が生まれたのである。

相馬は日本法律会社のメンバーを中心に、米法の法律語彙を翻訳する作業に取り掛かり、将来、日本の学生に外国の法を教えるための下準備を始める。さらに相馬・目賀田らは田尻と協力して、留学生を集め「興学社」というクラブを設立。興学社は主に経済、工学、法律を研究。ここで学校設立の夢は経済学と法律学を一との夢がさらに膨らんでいった。

1879年(明12)、勉学を終えた4人は順次帰国。「日本法律会社」の本社は既に日本に移されていた。

4人の創業者とその協力者は同年、とりあえず、福沢諭吉の慶應義塾に夜間法律科を、翌13年に箕作秋坪の支援を得て三しゃ塾に法律経済科を開設して講義を始めた。また相馬らは日本法律会社を拡大改組して「東京法学会」を結成。専修学校設立の一

つのステップとして、米国留学から帰国したメンバーのほか、東京大学法学部卒業の青年法学者を加え、一方で法律学校を興し、一方で法律雑誌「明法志林」の刊行にも力を注いだ。こうして専修学校は、慶應義塾の夜間法律科、三しゃ塾の法律経済科、東京法学部卒業生のグループが開いた東京攻法館の法律科の三者を統合して、1880年、ようやく創立に漕ぎつけた。東京京橋区に「法律科」と「経済科」において開校した。

当時、東京で法律学を教える専門学校は東大法学部と司法省の法学校の二つの官立学校にすぎず、東京大学では、英語で英米法を教え、司法省法学校では、フランス語でフランスの法律を教えていた。専修学校の法律科は、初めて日本語で法律学の各学科を組織的に教えようと言う画期的なもの。また経済学の専門教育課程を組織的に教える学校は官・公・私立問わず日本にはなく、初めて開校された経済学の専門学校となった。日本の教育界に新風を吹き込むものだった。

こうして開学時、学生数51人で始まった専修学校は、やがて専修大学へと身を結ぶのである。

【ニュース専修9月号3面】